

**Kenichiro
Mogi**

**Kaori
Nakano**

茂木
西洋の画家は自画像をたくさん描

中野
い本ですけど笑、執筆中には思いつかなかつた秘密がもうひとつあるんですよ。それからね、この「化粧する脳」つてい

**ヒラリーの失速は、
服装戦略の失敗?**

茂木 わかります。この前、市川海老蔵

さんと対談したんです。男はあまり化粧しないものですが、考えてみれば歌舞伎役者は自分で化粧するんですね。彼

ておそらく今もっともセクシーな男のひとりでけど、それが「化粧する男」であるのは大変面白いなと思ったんです。もちろん僕が会ったのは化粧を落とした海老蔵さんです。それでも、見られるこ

とに付随することごとも引き受けけることは顕在的な色気につつながるんだなと。それからね、この「化粧する脳」ついてい

女性が化粧することの脳への大きな影響を説いた『化粧する脳』を上梓した茂木健一郎氏。マイクと同様に、全身を装うファッショニストの中野香織氏と語る新鮮で興味深い「脳とファッショニズムの関係性」とは?

photographs:Takashi Ehara text:Yoshirei

4月某日の朝、都心のホテルにて。対談に先だって行われた撮影は、中野氏のヘアメイクを待つて始まった。

中野 お待たせしてすみません!

茂木 いえいえ。よろしくお願ひします。

日常ではそれほどマイクにこだわらないのですが、撮影があるときは、やはりプロの方にマイクしていただくんです。他人からはどれだけ違つて見えるのかわかりませんが、プロの手が入ることで安心できるんですね。小池百合子さんはカメラの前に立つとパッとイヤリングをつけると聞いたことがあります、それと似ていると思います。マイクは、パブリックな自分になるための小さなおまじないみたいなものです(笑)。

茂木 わかります。この前、市川海老蔵

さんと対談したんです。男はあまり化粧しないのですけど、考えてみれば歌舞

伎役者は自分で化粧するんですね。彼

ておそらく今もっともセクシーな男のひとりでけど、それが「化粧する男」で

あるのは大変面白いなと思ったんです。もちろん僕が会ったのは化粧を落とした海老蔵さんです。それでも、見られるこ

とに付随することごとも引き受けけることは顕在的な色気につつながるんだなと。それからね、この「化粧する脳」ついてい

い本ですけど笑、執筆中には思いつかなかつた秘密がもうひとつあるんですよ。それからね、この「化粧する脳」ついてい

い本ですけど笑、執筆中には思いつかなかつた秘密がもうひとつあるんですよ。

中野 と言いますと?

茂木 メイクもファッショニズムもそうですけど、努力している女性は素晴らしい

きますよね。レンプレントなんか相当の枚数を描いている。日本人は苦手意識があるのかあまり描きませんけど、たとえば森村泰昌さんが名画や女優を模して自ら全身に化粧してセルフポートレートを

撮る手法でアートを発表しています。自画像とは、自分と向き合って自分の顔を創っていくもの。つまり化粧と同じです

よね。そう考へると女性はすごい。他人に見られる運命を受けつつ、日々、鏡に向かって自分の顔をキャンバスにして、自画像を描いているんですから。脳の性質からいうと習慣としてやっていることは、長年蓄積すると大きな財産になります。最近、女性のほうがあらゆる面で意識レベルが高いのは、このせいなのかも

しれないと思つたんです。

中野 化粧の成果(笑)。しかも、女としては、毎日化粧しつづけているうちに、「すっぴんの顔は自分じゃない」と思い

始めるんですよね。私も今朝、ノーメイ

クでここに入るときも、みなさんと目が合わせられなくて。あとで「眞美の私」になるから待っててね(笑)。

茂木 それは、根が深いですね(笑)。

中野 そうですか? そんな女性は多いんじゃないかと思いますよ。

思います。それは心の余裕というか、潤いがあることの表れなのかなと思います。いざなことの表れなのかなと思います。中野いや、その余裕や潤いを見せようとしてすること自体が、実は大変なんです。時間もお金も気力も体力も必要ですから。たとえば、ハイヒールは肉体を酷使します。それでも履くのは、女としての権威をまとえる気がするから。背中に一本の

すじが通つて、自分を引き上げてくれる氣がするんです。だから私も大学で講義をするときは絶対にハイヒールです。通勤はローヒールですけど(笑)。

茂木 美は力、なんですね。武家政治の時代からそうだった。武力ですべてが動いてるわけではなく、宮中では美が権威の象徴でしたから。

中野 今年の1月でしたつけ。バンク・オブ・イングランドが女性の被雇用者に對して「女性は全員口紅をつけてヒール靴を履きなさい」というドレスコードを出した。不況だからこそ、服装を整えることが顧客の信頼を得ることにつながるという考え方なんです。ひと昔前のパワーヒラリー・ドレッシングとは違いますね。以前は男性と並ぶために、女性らしさを前面に出さないほうが信頼されるという考え方だったのに、今は逆。女性らしさを慈しむ装いのほう、社会的権威も高まる時代に來ているのかな。

茂木 確かに、興味深いですね。

中野 やはりヒラリー・クリントンの原色のパンツスーツは時代とずれていた



脳はファッショニズム・コンシンセプスだった



ですよね。多くの女性が「いつの時代を引きずっているの?」という感じでそれを眺めていた。そこに対照的に登場したのがアラスカ州の知事、サラ・ペイリン。

過激なほどに自分は女であることをファッショントンのなかで表現していく、ヒラリーが余計に古く感じられた。彼女の失速には服装戦略の失敗の影響もあったんじゃないかな。

茂木 ファッションステートメントつてありますよね。実は、僕の洋服たつてそう(笑)。毛玉のセーターやはき違えた靴下も、気にしない、というファッショントーストメントのつもりなんです(笑)。

中野 天才サイエンティストのトレードマークが、気にしない、というのはケンブリッジ(茂木が研究員を務めていた大学)では伝統ですもんね。私もケンブリッジで過ごしていきたのでわかります。

茂木 そうなんだ!

中野 アインシュタインは、靴下をはくことすらしなかつたのですしね。でも、茂木さんはきれいなほうですよ。イギリスの科学者は、みんな本当にボサボサですから。

茂木 確かに。街でビジネスやっている人たちと科学者って何か心情的な対立があるんですよ。ちゃんととした格好していると、普通の人になっちゃうという自意識があつたのかも。でも、無意識ですよ。自分がマッド・サイエンティストに見える服を着ようと思っているわけではない。コンフォタブルかどうかで、選んでいます

中野 科学者のコスプレではない。わかれります(笑)。

ファッショントリーダーは、男ウケより女ウケ

茂木 今考えると、フェミニズムの時代って何だったんだろうって思うんです。

あの頃って男性の視線を取り入れて屈服するような形で、女性は装いを強制されているといわれた時代だった。でも今はたとえ女性らしい装いでも、男性のためではない。むしろ男性の視線は二次的なものでしかなくて、女性自身の純粋な欲望でおしゃれするようになりましたよね。

中野 本当にそのとおりだと思います。ファッショントに対する意識が高い人ほど、異性の視線を気にしなくなつていく(笑)。茂木 こうなると、男は暴走する女性たちを眺めているしかないという。

中野 でも、歴史上的女性ファッショントリーダーたちも、みんな女性ウケがいいんですよ。18世紀のヨーロッパでも1メートルも盛つた髪とか、2メートルの羽根飾りに称賛が集まつた。それは現代のリムジンヒールに通じます。最近は、18センチのヒールを履いて登場したグワイネス・パルトロウとかね。もともとはナチュラル路線だった彼女が、あのヒールを履いて現れた途端に女性の支持が集まつた。ヒールが高すぎて足の血管がブツツと浮いていたんですよ。でも女性はあれを見て「カッコいい!」って(笑)。過激なことをあえてやる勇気にしびれたんでしょうね。男性から見たら、ナチュラルなファッショントンの女性のほうが好みでしようけど、女性には不調和や欠落感を埋めるような過激なスタイルや、新しいものを次々と生み出す人のほうがウケる

つあると思う。

茂木 なるほど(笑)。

中野 ただ、流行を生み出すリーダーはいいけど、それを追いかける側の人たちは大変ですね。女性だけでなく、男性もそう。とりわけ、今40代の男性かな。

情報とマニュアル世代だから、ファッショントンからデート法まで、おしゃれであることなどとらわれてしまうと、そこから降りられなくなる。

茂木 追いかけっこですよね。どんなに美しい流行も、ちまたのたくさん的人たちがねるようになつたら終わるわけで。『鏡の国のアリス』に、赤の女王、という存在が出てくるんですけど、アリスが女王に「なんですか」と走っているの?と聞くと女王は「この国では同じ場所にいるためには、走り続けなくてはいけないのよ」と答えるんです。生物進化ってそういうもののなのかもしれません。

中野 なるほど。でも、流行やブランドに惹かれてしまう人たちの心理って何でしょう?日本人は特にみんな同じものをユニフォームのように着たいという心理が強い気がします。

茂木 それは、帰属意識ですよね。有名な実験で、4歳くらいの女の子の額に赤い印を描いて鏡の前に立たせると、「変だ」と気づいて消そうとする。だけど、実験する部屋にほかの人がいて、その全員が赤い印をつけていたら、「なんで私が赤い印をつけたの?」と言つてつけただけついてないの?と

Kaori Nakano

服飾史家、エッセイスト。東京大学文学部および教養学部卒業。東京大学大学院総合文化研究所博士課程単位取得。ケンブリッジ大学客員研究員などを経て、文筆業に。新聞、雑誌、Webなどでファッショントンと時代に関する連載をもつ。2008年より明治大学国際日本学部特任教授としてファッショントン文化論を講じる。おもな著書は『愛されるモード』『ダンディズムの系譜』『モードの方程式』『着るものがない!』など。www.kaori-nakano.com



『愛されるモード』
(中央公論新社/1470円)

「私たちはいまどんな時代のモードのなかにいるのだろうか?」をテーマに、日本経済新聞に連載された88話のエッセイ集。モードとファッショントンから時代と世相、今、進むべき道まで見えてくる!?



「私はいま
どんな時代の
モードのなかに
いるのだろうか?」



1 近年、活躍目覚める舞伎役者、11代目藏は、舞台を降りてあってのモテ男。男は化粧すること、装い色香を生み出す力に

2 時代の変化に適応トレードマークであるスーストをはきつづけ家、ヒラリー・クリントンマイスタイルを貴重視治理念に関しては何んでも、ファッショニズムは時代錯誤感が否め、女性からの支持が少なくなっている。ファッショニズム戦略

3 一方、ヒラリーの「女性らしさ」をアピールする装いで旬の輝きを放つ。スカートのサラリーナphoto(1~3):©G



1

1 グウィネス・パルトロウ。プロデューサーの父と女優の母をもち、お嬢さまのイメージが強かった彼女。当時のファッションはナチュラル路線だったものの、結婚・出産などを経て、30代半ばを迎えた現在、モード路線に変更?

昨年、映画のプロモーションに18センチものリムジンヒールで現れて、一躍ファッションニスタの注目を集め、今年はTOD'Sの広告でミューズにも選ばれた。

©WireImage/Getty Images

©Photofest



2